
「cry」

基地外

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「cry」

【Nコード】

N4211A

【作者名】

基地外

【あらすじ】

とにかく泣き虫の由紀と、その幼なじみの宏樹の、ほんわか短篇ストーリー…のつもりです。

(前書き)

この小説は、厨房の書いた作品ですので、稚拙な文章になることを
お許し下さいorz

「ん、おはよ!! 由紀」

朝の時間帯、駅の改札から飛び出てきた一人の女性に気づき、俺は手を挙げる。

「あ、宏樹くん…」

俺…宏樹の前に走ってきた女性…由紀は、肩で息をしながら、俺の顔を見上げると、

「あ、あの…すみません、わ、私遅れちゃって…」

突然涙を流し始めた。

俺は少し困惑し、腕時計を確かめた。今は約束の時間である。

「え…? お、遅れたのか、これは…?」

「だ、だって私、5分前に来るって、ちゃんと約束したのに…」

「…お前なあ…」

俺は苦笑し、しゃくりあげる由紀の黒いロングヘアをくしゃくしゃと撫でて、言った。

「んなこと一々気にすんなって!!」

頭を撫でられてやや倒れそうになった由紀は、

「で、でも私、宏樹くんを待たせちゃって…」

しくしくと泣きながら俺を見上げてくる。

「そんな、5分も待ってねえよ。だからもう泣くな?」

「……………」

躊躇いがちに頷いたが、それでも由紀は泣き続ける。

「…じゃあ、行くか!!」

俺は泣き続ける由紀の手を取り、駅の出口へと歩きだした。

幼なじみの由紀は、泣き虫だ。

幼稚園の頃から高校生最後の今まで、由紀は本当によく泣いた。

家柄が良いからか、由紀は昔から芸術的センスに富んだ女性だった。

だが、それ故に感性も敏感で、今のうちに、本当に些細なことですぐに泣く。

泣き虫は必然的にいじめの対象になる。由紀もまた、幼稚園からずっとそうだった。

その度に、間に俺が入っていた。親しい者が悲しむ姿を見るのは、気分の良いものではない。

私立だからか、高校に入ってから随分マシになったものの、中学まではそれはひどかった。警察ざたにまでなったこともある。

：しかし、その間、由紀はずっと泣き続けたのである。なぜ脱水症状等にならなかったのかと、たまに感心さえしてしまう。

というわけで、あまり親しい友人もない由紀とは、今日のようによく遊んだりする。

今日の場合は、映画のチケットが余ったからと、由紀の方が誘ってきた。もちろん、断られるのを心配して泣きながら。

(…やっぱ、周りから見るとデートっぽく見えんのかな…)

何となく周りの目を気にしつつ、右を歩く由紀に視線を落とすと…俺の手を握る由紀は、まだしくしくと泣いている。

(…むしろ、なんか勘違いされてたりして…)

さっきとは別な意味で周りの目が気になり、無意識のうちに由紀の目元を拭ってやる。

「……………」

少し驚いたように、俺を見上げる由紀。相変わらず涙は止まっていないが。

「ほら、もう泣くなよ」

由紀の頭を軽く撫でてやり、俺は由紀に微笑みかける。

「……ありがとうございます」

安心したのか、由紀はようやく泣き止んだ。

…実は、由紀の泣き顔は、結構可愛い。

何となく名残惜しいような気分で、俺らは映画館に足を踏み入れた…。

……が。

今は映画を観おわり、由紀と伴に劇場から出るところ。

結局、僕の隣で、由紀はまた泣いている。

「なあ、もう泣くなよ」

俺は由紀を撫でてやるが、

「だって、だって、キツネちゃんがあんまり可哀想で…」

感動物の映画を観た由紀は、ちよっとやそっとじゃ泣き止まない。まともに昼食を摂れるかどうかも危惧しつつ、俺らは映画館から外に出た。

夕刻。

結局、ずっと泣き止まなかった由紀が落ち着くのを待ったため、今俺らは駅の近くの小さな公園のベンチに、並んで座っている。

「………」

さすがに由紀も少し落ち着いてきたようである。まだ少ししゃくってはいるが。

それを確認して、

「…じゃあ、そろそろ帰るか、由紀」

俺は立ち上がろうとするが…。

「…もう少し、だけ」

上目遣いの由紀にシャツの袖を引っ張られ、俺は再度ベンチへと戻る。

「……? どうした、由紀?」

「……その…」

僕の質問のもと、由紀が俯く。

「…宏樹くんとは、ずっと学校も一緒に…私がいじめられてたりしたら、助けてくれたし…すぐ色々お世話になったし…」

由紀が顔を少し上げ、僕を見上げてくる。

「その、だから…ありがとうございます」

由紀が、頭を下げてくる。

「あ…ああ、いや、どういたしまして…」

僕も慌てて頭を下げる。いきなり何なのだろうか。

「…あの……」

由紀はまた俯いてしまう。

「もうすぐ卒業で、宏樹くんとは離れてしまうし…いつまでも宏樹くんに頼っちゃいけないと、思っ…」

はっとした。

考えてみれば、由紀と俺とは進路が違う。

俺は、京都で就職する予定なのだ。

電話等での会話はあるだろうが、あと2ヶ月足らずで、もう由紀とは別れることになるのである。

俺には実感が湧かなかったが、由紀はそれを受けとめていたのだ。自分一人で。

「……由紀…」

由紀の目から、涙が溢れだす。

「…だ、けど…やっぱり、宏樹くんと別れるのが…淋しくて…」

由紀の涙は、止まらなかった。

俺は、初めて気が付いた。

由紀の涙は、俺の汚れを洗う。

だから、俺はそれに報いたかったのだ、と。

「……………由紀」

俺は、由紀を抱き締める。

由紀の華奢な肩を、しっかりと抱き寄せる。

「……宏樹、くん……」

由紀は、俺を見上げ、口を開いた。

「……泣いてるの……？」

涙が、止まらなかった。

ただ、俺が由紀を守っているだけだと思っていた自分が、恥ずかしかった。

悲しかった。

悔しかった。

「……ごめん、由紀」

涙を拭おうともせず、俺は言う。

「俺、何にも分かってなかった」

泣きながら、由紀に微笑んだ。

「……ありがとう」

由紀の顔にも、微笑みが浮かんだ。

俺と由紀は、涙を流しながら、それでも微笑んで、ただ抱き締め合っていた。

（後書き）

読んで下さった皆様、すみません駄作で。そして、ありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4211a/>

「cry」

2010年10月8日15時17分発行